

平成31年4月22日(月)

教師という職業

自分が教師になったのは、父親が教師であったからといって過言ではありません。自分が生まれてから、父親は、自宅がある地域の学校に転勤にしていたので、幼いころから、自分の家は夕方から中学生があふれている状態でした。

毎日の夕方の7時ころから生徒たちは集まってきて、学校から帰ると食事のままならないうちに、父親は、生徒の学習内容の中身を点検して、様々な指示をするとともに、一人一人頭を突き合わせて、教科にかかわらず教えていったようです。私はというと、奥の部屋から鉛筆と広告の裏紙をもって、中学生と一緒に勉強するのだという気概に満ちて、お兄さんやお姉さんのわきに座って勉強のまねごとをするのが日課でした。こんな幼児体験をしながら育ったので、職業意識が刷り込まれていたに違いありません。

教員になって、高校時代にやらなかった野球部に関わり、家庭のことをさておいて部活動に熱中し、9年間田村高校で監督を続けましたし、磐城高校で部長を務めましたので、子どもたちには、父親らしいことはあまりできませんでした。息子や娘には教師という職業は反面教師的に刷り込まれているの違いないと思います。なぜなら、二人とも、大学で教職の資格を取ることはありませんでした。

もともと、娘は教職の単位はすべて履修し、教育実習に行くだけだったのですが、家庭教師の体験から教員になることをためらっていかずじまいに終わりましたし、息子は、家庭教師を4年間続けたにもかかわらず、教職そのものを取る気はさらさらなかったようです。大学院に行くときに、教職を取るという約束をしたものの、そんなことはその場限りの口約束でした。

さて、自分のことはさておき、教師という職業について少しお話します。

教師という職業は、残業手当などとは縁もゆかりもなく、教職調整額という一律の微々たる手当のみで、課外手当なども勤務時間中は出ることもなく、今になって少しは週休日の部活動手当も出るようにはなったが、決してお金のことで勤めるのではないという教員特有の矜持の中に皆がいるので、いつも心の中に多忙感と疲弊感がないまぜになって苦しんでいる先生がいるのではないかととても心配している今日このごろであります。

部活動顧問になると、勝てば勝つほど暇がなくなるという大きな矛盾の繰り返しで、生徒の皆さんに教員という職業を推すときに、少し口ごもるときがあるのも事実です。

しかし、生徒の喜びと安心と崩せない信頼の中にあるとき、こんな職業はまたとないものだと声を大にして言いたくなるのも事実です。キラキラしたまなざしの授業ができたとき、部活動で勝利を収めたとき、進学指導が思うように進んで生徒が大学等に合格したとき、ひとりで「よしっ！」とガッツポーズをすることができる職業であります。

長い間、教育委員会で勤めましたが、心はいつも現場にあり、現場こそが自分のいるところだと常々思っておりました。現場を支えることが、その時代の自分のポリシーでした。

現場に戻れば、現場の苦しみもあります。思うようでない自分に歯噛みしながら、それでもすぐ傍に生徒がいることの素晴らしさはたとえようがありません。

様々な子供たちの中で、10年たったら戻ってくる志を持った生徒を育成することができます。現に教員になっている多くの者たちには、必ず師と仰ぐ人がいるから教員を目指したのだと考えます。

次なる世代を支える人々の中に、必ず教員という職業を選択してくれる人材は間違いなく出てくると確信します。そんな学校にしたいと心から願います。

生徒の皆さんも、ぜひ、何人かの人は志として教師を目指してください。卒業生の皆さんも、様々な紆余曲折を持ちながら、心の中にポッと磐城高校の灯がともったら教師を目指してみてください。

特に、この春、捲土重来の道を取らざるを得ない中、勉強している皆さん、3日目、3週間目、3か月目はいろいろな障壁が出る場合があるので、注意して生活してください。疲れたら少し休んで、連休には学校に来てみるのも一策です。

志があるところに必ず道が生まれます。次なる時代を支えるべく、皆さんが力を発揮することができるよう心から祈ります。頑張れ。とすることができるのも、教員としての役得かもしれません。